

○中村剛・押川純二・吉岡秀樹
(宮崎総農試畑作)

【目的】

本県における契約栽培推進品目の一つにジュース原料用ニンジンがあり、県内で広く栽培されている。夏まき冬どり栽培となるため、生育初期に台風や干ばつの影響を受けやすく生産が不安定になりやすい。そこで、2007年度より栽培法の検討を行い、気象条件に影響を受けにくく安定した収量が得られるは種深度は20mmであり、かん水を行うことで高収量が得られることを明らかにした(2009中村)。

今年度は、畑地かんがい用水の活用と密植栽培による高収量・高品質生産技術を検討する。

【材料および方法】

品種は「KI-3」(コート種子)を供試し、2010年8月23日に真空播種機(株式会社啓分社製作所トラクタ用KD-401)を用いは種した。施肥量は10aあたりに完熟牛糞たい肥2,000、炭酸苦土石灰120、N9.6、P₂O₅24.0、K₂O12.3(kg)とし、2010年8月16日に全面全層施用した。追肥土寄せは2010年9月28日に畦間に10aあたりN4.2、P₂O₅0.0、K₂O5.1(kg)を施用し、その後土寄せを行った。収穫調査は2010年12月13日に行った。スプリンクラーによるかん水は8月23日(16.8mm)、9月24日(14.4mm)、10月7日(9.6mm)の合計3回・40.8mmとなった。

試験区は要因Aかん水(かん水区、無かん水区)×要因Bは種粒数(1粒点播、2粒点播)×要因C株間(5cm、7cm、9cm)を設け、1区27.0m²の反復無しとした。なお、栽植密度は表1に示した。

【結果および考察】

1) かん水によるニンジン根重の増加割合(表2)

1粒区におけるかん水による根重の増加は株間7cm区で最も大きくなった。また、2粒区においても株間7cm区で最も大きくなった。

1粒区と2粒区を比較すると、1粒区における根重の増加割合は96~115%であったのに対し、2粒区では126~148%となり、かん水効果は高かった。

2) かん水、は種粒数及び株間がニンジンの可販果収量に及ぼす影響(図1)

無かん水区では、は種粒数を1粒から2粒に増加させても、可販果収量に差は認められなかった。また、株間においては5cm区で可販果収量が最も高くなった。

かん水区では、は種粒数を1粒から2粒に増加させることで可販果収量の増加が認められた。また、株間においては5cm区で可販果収量が最も高くなり、9060kg/10aとなった。

以上の結果から、ジュース原料用ニンジン夏まき冬どり栽培において、株間5cmのコート種子2粒点播とし、更にスプリンクラーによるかん水を行うことで、10aあたりの可販果収量は9,060kgが得られる。

表1 栽植密度

	播種粒数	
	1粒点播	2粒点播
株間 5cm	66,666株/10a	133,332株/10a
7cm	47,619株/10a	95,238株/10a
9cm	37,037株/10a	74,074株/10a

表2 かん水によるニンジン根重の増加割合

は種粒数	株間	無かん水区 (g/本)	かん水区 (g/本)	増加割合 (%)
1粒	5cm	164	157	96
	7cm	193	221	115
	9cm	226	239	106
2粒	5cm	92	124	135
	7cm	102	151	148
	9cm	135	170	126

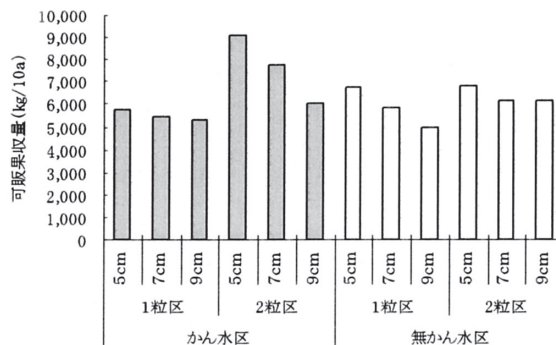


図1 かん水、は種粒数及び株間がニンジンの可販果収量に及ぼす影響